

時制と実在

——アベラールの意味論とその限界——

町 田 一

アリストテレスは『命題論』(ポエチウス訳)¹⁾において「ホメロスは何かである、例えば詩人のような」という付帯的に述語づけられた命題から「ホメロスがある」という存在命題を導くことはできないと述べている。『命題論』においては、「付帯的に述語づけられる」の意味は基本的に二通りある²⁾。即ち、命題「PはQである」の場合、主語項Pに対して述語項Qが付帯的に述語づけられているか、あるいは多項述語「良い靴屋」の「良い」が「靴屋」に対して付帯的であるのと同じく述語項Qに対してコブラ「である」が付帯的に述語づけられているかである。「ホメロス」の場合の付帯的述定は後者にあたる。以下での付帯的述定はすべてこの意味で用いる。

コブラは「詩人」に対して付帯的に述語づけられたものであるため、直接「ホメロス」自身を述語づけるものではない。つまり「自体的に」述語づけられたものではない。従って、「ホメロスは何かである、例えば詩人のような」から「ホメロスがある」は導かれぬ。アリストテレスはこのコブラを、述語項と主語項とを結び付ける役割のみを持つ「第三の付加」³⁾と呼んだ。アリストテレスによれば動詞は時制表示を伴うが、このコブラが動詞にあたるかどうかははっきり述べられていない⁴⁾。このため、「第三の付加」としてのコブラは、動詞なのかそうでないのか、動詞であるのなら、どのような性格を持つものなのか、『命題論』の注釈史において論議されるようになった。この経緯はハント氏の論文に詳しい⁵⁾。

本稿は、そのコブラ解釈に一石を投じたアベラールの考えについて、時制と実在という視点から述べる。

アリストテレスをうけて、アベラールは『命題論注釈』⁶⁾(以下 LI.)と『ディアレクティカ』⁷⁾(以下 D.)とにおいて非実在の名「ホメロス」の述定を論じている。しかし、時期的に隔たるこれら著作の間には述定のポイントに相違がある。LI. では付

帶的述定「詩人である」は比喩的と言われる一方で、D. では本来的と言われる⁹⁾。また、その前後関係について言えば、筆者は少なくとも付帶的述定の議論に限っては、LI. より D. が後と考える。以下で見るようにアベラールは LI. では「比喩的」とした述定を、D. では「比喩的（非本来的）ではなく本来的」と述べる。仮に、LI. の方を後とすると、それ以前の D. での「本来的」という主張を撤回する議論がそのどこかになければならないが、どこにもないからである。これについてはⅠ章でも述べる。

「詩人である」を比喩的とするか本来的とするかでは述定のポイントが食い違うようにみえる。しかし、「ホメロス」のような非実在の名であっても、その名の現れる命題の真理が実在にかかわる点で LI. も D. も結局同じことを主張している、とみる。問題はアベラールの前提、「定言命題の真理は、ものの実在にかかわる、ものの現実を命題化する」⁹⁾という言葉が実在論的前提のもとでの非実在の名の論理的処理である。特にコブラの時制表示と併せて、LI. と D. とを比較しつつ、まず「ホメロスは詩人である」、次に「キマエラは想像可能である」を挙げて述べる。

I

「ホメロスは詩人である」について LI. では次のように言われている。

例えば、「ホメロスは詩人である」と言われる時、ホメロスの詩について、我々は比喩的に理解しよう。そうすればこう言えるだろう、「ホメロスの詩が実在しかつ（ホメロスの詩は）詩人である」と。これらは命題の同一部分、即ち、述語において互いに結びついている。（詩と詩人とは）本来の（名の）発案からは互いに何ら対立するものではない。〈詩〉がなければ詩人はありえないのであるから。……「ホメロスは詩人である」と言われる時、「ホメロスの詩が実在する」と言う意味で「詩人」は詩の表示に比喩的なある仕方にかかわる。というのもそれが表示しているところの詩にちなんで我々は詩人と呼ぶのであるから¹⁰⁾。

アベラールは「詩人である」が詩の実在に結び付いていることを比喩的に理解しよう、と言う。この時、主語「ホメロス」はホメロス自身を表示していないことに注意したい。

我々は、こうして属格に分解された、死んでしまった「ホメロス」を通して、そして転換か多義を通して、さらに詩というディクターメンを通して（「ホメロスは詩人である」という命題を）表示することができる¹¹¹。

先取りして言えば「ホメロス」はホメロス自身を指定するだけでなく、その詩を限定することもできる。この限定という表示理論における新たな視点の導入は D. においてなされる¹²⁾。一方、LI. でも「ホメロス」の表示の多義性が認められている点に気づく。ところで、「ホメロス」が多義的な表示を持つということにおいて一見アベラールは固有名と一般名の区別は無頓着のようにみえる。しかし、D. では固有名と一般名とはその名の設定においてははっきり区別されている（ただし、この区別には疑問の余地がある¹³⁾。LI. においても同じ区別に基づいて「ホメロス」の述定が議論されている。というのも「ホメロス」が指示対象を失う場合の述定が問題になっているのだから。そして同時にコブラが現在時制であることもネックとなる。「ホメロスは詩人だった」ならばそもそも現実的に「ホメロス」がいないことは問題にならないのだから。また、「転換」は、ミュウズ氏によれば「語が、その意味を複合的表現においていかに変化させるかを説明する」もので、D. ではみられない用語である¹⁴⁾が、次にみるようにアベラールが D. でこれに触れないのは述定の本来性という考えに到達したからである。

さて、LI. と違って、D. では「詩人である」は本来的と言われ、「ホメロスは詩人である」は本来的発話とされる¹⁵⁾。その述定を比喩的（非本来的）とみなすのは *Magister noster V.* であるとアベラール言う。このアベラールの豹変ぶりはともかく、D. で「詩人である」が本来的と言われるのは「実在の名の設定も非実在の名の設定も同じである」¹⁶⁾からである。実在の名の述定がその実在について本来的になされるのと同じように、非実在の名の述定もその非実在について本来的になされるのである。D. において「転換」の議論がみられないのは、名の設定に応じた述定であれば、その名が実在のものであろうと非実在のものであろうと、その述定は本来的と呼べるという思想に到達したからであり、わざわざ比喩的な「転換」を述定に持ち込む必要がなくなったからである。先に、LI. よりも D. （のある部分）の方がより後のものとみなす旨を述べたが、筆者は「転換」よりも述定の本来性という考えの方がより成熟したもののように思う。そもそも、述定を比喩的とみなす説はアベラール起源

のものではなく *Magister noster V.* の主張であるとアベラールは *D.* においてことわっている。もし、*LI.* の議論の方が *D.* より後であるなら、そのアベラールの議論には独創性のかげりもないことになる。

Magister noster V. が付帯的述定を比喩的と言ったことをうけて次のようにアベラールは言う。

しかし、これに対して（師の意見に対して）私に言わせれば（「ホメロス」が）ディクターメンという意味で論じられる時は、それ自身（ホメロス自身）が論じられることを経てその名（ディクターメンという意味での「ホメロス」）が置かれる。「ホメロス」という名がディクターメンである時、ホメロスが存在することは単純には認められない。つまり、これ（ホメロス自身を指定しない「ホメロス」）は、ホメロスのディクターメンであって、彼自身が死んだ後にも維持されている。では、「ホメロス」という名がディクターメンである時、「詩人」で理解されているものは何か？ 詩人という名にちなんで詩自体が名指されるのなら、「ホメロスは詩人である」は比喩的発話ではなく、多義に応じた新たな音声を受け入れるものである。……つまりこういう意味である、「ホメロスの詩が詩人である」。詩を創ることから詩人と言われるのであるから、それゆえ（「ホメロス」は）詩についても何かを示しており分解の意味で、詩の意味を持ち、ディクターメンは（詩）自体を名指す。……従って、「ホメロス」は詩歌の限定に対する意味で置かれ、「詩人」はその名指しに対する意味で置かれるのだから、「ホメロスがある」と自体的には言われ得ない¹⁷⁾。

「詩人である」が比喩的でないことを述べた上で、アベラールは「ホメロス」の命題における限定という表示に触れている。この限定という表示次元の「ホメロス」がディクターメンと呼ばれる。言い換えれば、ディクターメンとは固有名が命題においてそれ自身以外の表示を持つ時の、その固有名の修辭的呼び名である。ハスキンス氏によればディクターメンは11世紀後半から、イタリアを経てフランスへと発展した修辭学用語で「修辭的作文」を意味する¹⁸⁾。Du Cange には '*Scribendi forma et modus, formula, stylus, prosa, ……*' とあり、マーフィ氏も中世特有の修辭学用語であるがそのラテン語としての起源は定かでない¹⁹⁾。アベラール

が修辞学を習った、シャンポーのギョームがこの用語を手中に収めていたかどうかははっきりしないが、シャルトルのティエリーの修辞学には現れている²⁰⁾。修辞的の作文のお手本にはホメロス以来の詩も含まれていたことはすでに分かっているが、アベラールは修辞学におけるディクターメンの用法を何らかの形で知り、「ホメロス」は詩を限定する表示を持つという考えを編み出したと筆者は推測する。

LI. も D. も「詩人である」が詩の実在を想定しているのは明らかであろう。結局、「ホメロスは詩人である」は「実にかかわる」と言える。

問題は、非実在の名が実在を（命題の中での限定としてであれ）表示するという一見矛盾した論理がどうやって成立し得るのかということである。

ここで、D. においてなされるアベラールの提案に注目したい。コブラを「述語の部分」として述語項とともに「一つの動詞」とみなす提案である²¹⁾。例えば「詩人である」を「詩人している」とみなすのである。この提案が文法的には差し支えのあることをアベラールは認めている²²⁾。この提案の意味は何だろうか。

LI. でもアベラールはコブラと述語項とを併せて「述語」とする考えを述べているが、それを「動詞」とは呼んでいない。LI. においてコブラと述語項とを併せて「述語」とするのは次の理由による²³⁾。例えば「ソクラテスは少年であった」において「少年」と「であった」とを切り離してしまうと名詞「少年」は現在実在する「少年」を表示することができる（LI. においてもアベラールが名詞も時制表示を持つと考えていることは明らかである）以上、この文は「ソクラテスは現在実在する少年であった」という意味不明な内容を持つことになりかねない。こうした矛盾を防ぐにはコブラと述語項の時制を統一しておけばよい。そこで、コブラと述語項とを併せて「述語」としておけば時制表示の点では矛盾は起らない。

一方、D. ではその「述語」は「一つの動詞」とみなされる。もちろん述語と動詞は文法的にも次元の異なるものである。しかし、アベラールは付帯的述定一般について「Qである」を動詞「Qする」と理解しようと提案する。例えば、「人間である」を「人間する」（この現在時制表示動詞の不定形が即ち‘esse hominem’）という「一つの動詞」とみなすのである。この提案の意味は「第三の付加」たるコブラが見れる命題にも動詞が歴然と含まれる点にある。アリストテレス、さらにプリスキアヌス以来の「第三の付加」が一体動詞なのか、そうでないのかという論争に決着をつけたわけである。

ただし、「ホメロスは詩人である」の場合、アベラールは「詩人である」の現在時制表示に力点を置いたので困難が生じた。「詩人である」を「詩人している」とみなすことで現在時制表示の動詞がその命題に含まれるのはいいが、「ホメロス」はすでにいない。そこで、現在において残存する「詩」を「ホメロス」は限定するという苦肉の策により、結局、「ホメロスは詩人である」の真理を維持できると考えたのである。ディクターメンとはこの「詩」を限定する時の「ホメロス」に対する呼び名に過ぎない。固有名のまさに修辭的用法と言えるが、固有名の固有性と一般名との区別に根本的なところで厳密でないと言わざるを得ない。

では、初めから指示対象を持たない名の述定はどうなるのか。

これもアリストテレスの『命題論』で挙げられている「想像可能である」という述定を手がかりに「キマエラ」についてアベラールは論じている。次に、これをみてみよう。

II

「想像可能である」は LI. ではやはり比喩的と言われるが、二通りの仕方で比喩的である点で「詩人である」とは異なる²⁴⁾。

- i コブラは「呼ばれる」という名指し動詞に転換
- ii 「想像が（人において）持たれる」という意味での比喩

i はコブラ＝「呼ばれる」即ち「想像可能である」＝「想像可能と呼ばれる」、つまり主語の名＝述語項の名、いわゆる同一説である。この同一説は D. において現れると論じられてきたが²⁵⁾、このように LI. で言及されている。一方、LI. ではコブラについては内属説をとると言われてきた。内属説とは、柏木氏によれば「Socrates est albus において、albus は主語に二様に結び付けられる。一つは albedo in adiacentia すなわち偶性的に付け加わる白さであり、一つは albus in essentia つまり白さによって存在する白いものである。ところで結び付けられるものがすべて述語されるのではなく、命題によって結び付けようと意図されるものが述語される。したがって、命題は白さがソクラテスに内属することを示している」²⁶⁾というものである。ところが、アベラールは『トピカ注釈』ではこの内属説をシャンポーのギョームとそ

の追隨者の説として一刀兩断に切り捨てている²⁷⁾。命題の意味が「二様に」（即ち、論理的及び文法的に）とられることを斥けるためである。アベラールは「キマエラ」の述定を内属説で説明するには無理があることに気づいている。結局、内属説は LI. において全面的にとられている立場とは言えない。

付け加えれば、D. では LI. とは打って変わって同一説がとられたように柏木氏も論じているが「想像可能である」はもっぱら ii の意味で解釈されている。アベラールのコブラ解釈を単純に内属説から同一説への方向転換とみるのはおそらく間違っている。

さて、ii は「想像可能である」は「人間が（何かを）想像している」に比喩的に結びつく、というものである。「想像が持たれる」は、想像を持つ人間の精神を主語のようにたてる。アベラールは『カテゴリー論注釈』では次のように言う。

「キマエラは想像可能である」と我々が言う時、何もキマエラに帰属させてはいないが、むしろキマエラを想像する何者かの精神を示している。というのも非實在についてあたかも實在のものであったかのように、しばしば我々は便宜的に言っている、とみるのがより理に適っているようだから²⁸⁾。

アベラールはこう述べた後で、マクロビウスが、数学的対象としての線分や面は實在するとは言えないがある意味では数学的物体とみなせる、と考えていたことにふれている。しかし、アベラールはキマエラをある意味での實在と想定しようと言っているのではない。キマエラには一切の属性は帰せられないのである。例えば「火を噴く怪獣である」という述定は定義にはなり得ても、付帯的述定にはなり得ない。もちろん「想像可能」がキマエラの属性であることにもならないし、非實在の「存在論的可能性」などをアベラールが主張しているとも言えない。ブラックウェル氏の *Non-Ontological Constructs* での解釈には無理がある²⁹⁾。「想像可能である」は想像を持つ人間の實在を想定している、と言うべきであることについて ii が強調される D. をみてみよう。

「想像可能である」は D. ではやはり比喩的あるいは非本来的とは言われず、本来的とされるが、アベラールは *Magister noster V.* の考えを基本的に受け入れてはい

このように (Magister noster V. は)「キマエラは想像可能である」を付帯的で非本来的発話であると言ったが、この意味では「想像可能」を通して存在しないところのキマエラには何ら属性は帰せられない。が、キマエラを想像している何者かの精神に想像が与えられている。あたかも何者かがキマエラを想像する、と言われるように。しかし「想像可能」はただ非実在の名として本来的に定められているのであるから、想像が持たれる限り、「キマエラは想像可能である」と言われる時にはキマエラに対するその述定(「想像可能である」)は本来的に置かれているのである³⁰⁾。

LI. で挙げられた i 説についての言及がないかわりに ii 説が強調されていることが分かる。しかし「キマエラは想像可能である」が「実在にかかわる」理由が問題である。「ホメロス」と違って「キマエラ」は本来的に指示対象を持たない。「想像可能である」は LI. では「想像が持たれる」の比喩とされ、D. では比喩とは言われませんが「何者かが(キマエラを)想像する」と結び付けられる。ここで述定「想像可能である」が比喩的であれ本来的であれ、想像を持つ人間の実在にかかわっている、とここで推論するのは不自然ではなからう。D. では、付帯的述定「想像可能である」は動詞「想像可能する」とみなされる。明らかに、アベラールはこの「動詞」も現在時制表示を持つと考えている³¹⁾。従って、主語「キマエラ」は指示対象を持たないのでアベラールは自身の実在論的前提により、あたかも隠れた主語のように、「(現在)想像している人間」を持ち出さざるを得なくなった。

「ホメロス」の場合と同じく、述定の本来性と時制表示の問題をアベラールは混同している。

ともあれ、語は述定を通した命題の中で初めて意味を持つが、その語が非実在のものであっても実在論的前提のもとで我々は命題の真理を理解する、というのがアベラール意味論の基本的な立場であると言える。かつて、ド・レイク氏はアベラール意味論の特徴を「文脈的アプローチ」と呼んだ³²⁾。この指摘は、指示対象を失った「ホメロス」の用法において端的に見られたように、固有名が命題の中ではそれ自身以外の表示を持つという点で(筆者はアベラールの説は誤りであると考えるが)正しい。また、付帯的述定一般において、時制表示付加のコブラと述語項とをあわせて「動詞」とみなす提案は、コブラというきわめて厄介な単體を現代において考えるのにも刺激

的である。しかし、固有名のある命題の述語が常に時制付加を伴うとは言えないし、ましてアベラルーの實在論的前提を必要とするとは言えない。ただ、述語の時制付加と實在論的前提はつながりのある問題であることに、おそらく論理学史上初めて気づいたのがアベラルーであるとは言えるだろう。

註

- 1) Aristoteles: *De interpretatione*, translatio Boethii, ed. L. Minio-Paluello, Bruges, 1961, 11. 21a25.
- 2) *ibid.* 11. 20b31ff.
- 3) 「第三の付加」は *tertium adiacens* の訳語である。
- 4) *ibid.* 10. 19b5-19b19.
- 5) R. W. Hunt: 'Studies on Priscian in the Eleventh and Twelfth Centuries, I.' in *The History of Grammar in the Middle Ages*, Amsterdam, 1980.
- 6) P. Abaelardus: *Logica Ingredientibus*, ed. B. Geyer, Beitrage zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters 21, 1919-1927.
- 7) P. Abaelardus: *Dialectica*, ed. L. M. de Rijk, 2nd ed., Assen, 1970.
- 8) 「比喩的」は *figurative*, 「本来的」は *proprie* の訳語である。
- 9) D. p. 279.
- 10) LI. p. 480. 以下の本文訳中(挿入)はすべて筆者。
- 11) *ibid.*
- 12) D. p. 111ff. 尚、「指定する」は *designare*, 「限定する」は *determinare* の訳語である。
- 13) D. p. 124.
- 14) C. Mews: 'Aspects of the evolution of Peter Abaelard's thought on signification and predication' in *Gilbert de Poitiers et ses contemporains*, ed. J. Jolivet and A. de Libera, Naples, 1987. 「転換」は *translatio* の訳語。
- 15) D. p. 137.
- 16) D. p. 138.
- 17) D. pp. 168-169.
- 18) C. ハスキンス『12世紀ルネサンス』別宮他訳、みすず書房、1989, p. 112ff.
- 19) J. Murphy: *Rhetoric in the Middle Ages*, California, 1974 p. 194ff.
- 20) *The Latin Rhetorical Commentaries By Thierry of Chartres*, ed. K. M. Fredborg, Toronto, 1988.
- 21) D. p. 138. *verbum* は「動詞」と読むべきである。
- 22) D. p. 140.

- 23) LI. p. 349.
- 24) LI. p. 482.
- 25) ド・レイク氏の序文 (D.) 参照.
- 26) 柏木英彦「verbum substantivum と significatio」『中世思想研究』24, 1982.
尚、筆者は柏木氏の「est poeta の場合, esse poeta という一つの事態を指し示す」との解釈はとらない。本文で触れたように 'esse Q' を現在時制表示の動詞の不定形と読むからである。つまり、普遍や事態とは何の関係もないとみる。
- 27) この箇所は岩熊氏に指摘して頂いた。
- 28) LI. p. 175.
- 29) D. Blackwell: *Non-ontological Constructs*, Berne, 1988.
- 30) D. p. 168.
- 31) D. p. 138. 特に、「未来や過去についても事情は同じ」という論述に注意。
- 32) *Logica Modernorum*, II, 1, ed. L. M. de Rijk, Assen, 1967, p. 199.